

## 教師の生活意識\*

—教師研究の基礎資料—

村瀬隆二 岩井勇児 平野典子\*\*

## I 問題

「指導者と被指導者との人間関係に関する教育心理学的研究——特に指導者養成の観点から——」と題する、昭和37年度文部省科学試験研究費による研究のうち、普通学級（「特殊学級」というよりも名に対して、ノーマルな児童生徒を指導の対象とした学級を「普通学級」とよぶことにした）に関する問題を担当したわれわれは、次の2つの調査研究を報告してきた。1つは、教師と生徒との相互交渉によって形成されると考えられるところの、学級の雰囲気、生徒の対担任教師態度、担任教師のパーソナリティ、および担任教師の指導態度の4つの面について、学級および担任教師の現実像と理想像について調べたものである。他方は、こうした教師と生徒との関係に大きな影響を及ぼす教師の指導意欲について、それを教師の行動との関係、および、生徒による評価との関係において調査したものである。

これらの調査研究はそれなりに、それぞれの当面の目標を達成したのではあるが、必ずしも十分なものではなかった。それは、教育現場の生々としたものから遠ざかってしまったのではないか、と感じられることに関係している。われわれが、教師の問題を研究対象としても、その核心に迫ることがむずかしいのは、ひとつには、教師を研究対象とすること自体にまつわる困難性があるからであるとも考えられる。しかし、研究者の問題として考えると、用いる技法が未熟であることのほかに、われわれが、研究対象とする小中学校教師の生活そのものについて、あまりよく知らないということがあげられるで

あろう。すなわち、現場教師の生活を具体的にはあまりよく知っていないために、問題としてとりあげる題材そのものが現場から離れて抽象的になってしまったり、あるいは、問題にせまっていくために用意した質問紙や面接の観点が、教師自身の感じている感じ方とは異なっていたりしているのである。いいかえると、われわれの限られた知識をもとにして、教師生活というものを第三者的に眺めているにすぎない場合が多く、研究者が教師生活の内面にはいりこんで、現場教師と同じ立場にたって教育現場での問題を考えていくという研究にはなっていなかつたと思われる。

このような反省から、われわれは、現場教師の具体的な生活について、もっとよく知っておく必要があることを強く感じたので、昭和38年度においては少々廻り道をすることにした。すなわち、われわれが、はじめからある枠組をもって教師の生活を眺めるのではなくて、もっと素朴に、現場教師の具体的な生活のありさまを知ることを第一の目標としたのである。

ここで目標としたものは、いわゆる生活実態調査が求めているようなものではない。教師が生活している心理的世界といふか、教師の生活空間といふか、表現はともかく、教師の生活している世界といったものがどのような構造をもち、そのなかで教育活動や教師の個人生活がどのように営まれているか、ということである。われわれが、教師の生活空間といったものを問題にしようとしたのは、教師という指導者は、産業界における指導者とはかなり異なった性格をもった世界に住んでいるのではないかと思うからである。子どもを対象として教育活動をしているという独特なことがらが、ほかの社会に生活している人々とはかなり違う生活をもたらしているのではないか。われわれは、このような教師の生活している世界を、できるだけ全体的にとらえていきたいのである。

このような問題にせまっていくために、われわれは、教師生活全般にわたっての知見を収集して、教師を研究

\* この報告は、昭和38年度文部省科学試験研究費による研究の一部である。この報告の執筆は村瀬隆二と岩井勇児が担当した。

\*\* 当時本学部助手、現京都大学教育学部聴講生

\*\*\* この研究班の構成は、塩田、水原、村瀬、三輪であるが、実際の調査研究には、さらに、岩井、長田、増田、（大学院博士課程学生）が参加した。

## 教 師 の 生 活 意 識

対象とする際に必要な基礎資料にしようとした。そのためにできるだけよそ行きではない教師の姿に接することによって、教育現場での教師の問題を内側から考えいくことはできないものであろうか、というのがこの報告のテーマである。

われわれの研究目標のひとつでもある教師養成の問題のなかには、ここで取上げようとする立場から出発して検討すべき点もあると思われる。教師養成の問題は、単なる技術の問題ではなく、人間としての全体的な問題として検討すべきではなかろうかと考えるからである。

### II 方 法

それぞれ職業活動を営んでいる成人を対象とすることは、なかなか困難なことであるが、教師の場合にはとくに外から入りこみにくい世界のように思われる。そのこと自体が教師職のひとつの特徴をあらわしているともいえるであろう。そこで、われわれは、できるだけ親しく現場の教師と懇談する機会をもち、その話題のなかから教師の姿を見出していこうと考えた。あまり輪郭のはっきりしないものではあるが、研究の現段階においては、このような記述を丹念に積みあげておくことが、今後の研究の展開にとって、けっして無駄なことではないと思われる。

#### 1) 調査方法

数名の教師との集団面接、および、各教師との個別面接。面接に際しての質問項目などはあとで述べるが、話題のいとぐちといった形のものを用意し、そこから発展していくその場の自由な発言に重きをおいた。集団面接においては、より自由な懇談ができるようにと茶菓などを用意した場合もあった。

#### 2) 調査対象

岐阜県下2校、愛知県下3校の小学校教師約40名。いずれも郡部の学校である。学校と地域社会との関係が比較的はつきりしていることと、親しくひざをつきあわせて懇談するために好都合なことから、郡部の規模の大きくてない学校を選んだ。\*

岐阜県下の2校は集団面接のみで、愛知県下の3校は集団面接と個別面接をあわせて行なった。

#### 3) 調査時期および調査者

岐阜県下2校には、昭和38年7月、1泊2日の日程で出張して集団面接を実施した。

面接者は次のとおりである。

\* 岐阜県下の被調査校の選定および依頼は岩井が担当し、愛知県下の被調査校のそれは塩田助教授をわざわざした。

A班：村瀬隆二、長田雅喜\*

B班：岩井勇児\*、三輪弘道\*、平野典子

愛知県下3校には、昭和38年10月、3泊4日の日程で、現地に宿泊して面接を行った。\*\*\*  
面接者は次のとおりである。

A班：塩田芳久、岩井勇児、平野典子

B班：村瀬隆二、三輪弘道、長田雅喜、三神広子\*\*

なお、滞在中に、全員で、父兄の有志数名、卒業生有志数名とも面接し、教師について懇談した。

#### 4) 調査内容

岐阜県下における集団面接については、主として次のような質問事項を用意した。

##### 1. 指導について

- ①地域の子どもの学力、進路、地域社会の特徴、父兄の要望
- ②指導の重点、指導の要領、指導態度、教材および指導法の研究、指導の計画、指導の力点

##### 2. 教師の生活

- ①個人生活：職場と家庭、研修、教養、趣味
- ②つきあい：教師集団、新卒者、校長や指導主事、P.T.A.（父兄）、生活設計（老後の問題）、教師就職の動機
- ③校務

##### 3. 教師職に対する現場教師の意見

- ①教師観、個人的な人格の完成の必要
- ②教職観、魅力のあるものにするために改善すべき外的条件。教育活動の範囲と量

これらのことから、指導意欲（やる気）、生き甲斐、考えが変わってきた時期、などをからませた。かならずしもここにあげた範囲全部を質問したのではないし、別の話題も生じた場合があったこともつけ加えておく。

愛知県下における集団面接において準備した質問事項は次のとおりである。

1. 地域の子どもたちの実態
2. 地域の父兄たちの実態
3. 子どもや父兄の学校や教師に対する態度
4. 各学級担任教師の指導態度の特徴
5. 教職観、教師という職業の特徴
6. 教育活動における指導意欲の意義と価値
7. 教師職に対する魅力

\* 調査実施当時、大学院博士課程学生。

\*\* 元本学部教育心理学科研究生。

\*\*\* なお、この面接調査と同時に、塩田、三輪らが別に、計画した児童生徒に対する質問紙調査が並行して実施された。

## 試験研究

8. 教師の地域社会との接触態度
9. 教師養成において強調されるべき点
10. 教師として新に就職する人たちへのアドバイス  
愛知県下における個別面接において準備したおもな質問事項は次のとおりである。

1. 教師職へ就いた動機とその後の変化
2. 教師の指導態度
3. 教師の自己形成
4. 指導のし方
5. 教師養成への注文

これらの質問事項には、若干の肉づけをして、具体的な質問を作成しておいた。ただし、順序やそのつづ込み方の程度などはその場の状況によって適宜変えた。面接時間は、集団面接で3～4時間前後、個別面接で1時間前後である。したがって、延時間数はおよそ40時間というかなりなものである。

### III 結果の整理とその内容

われわれは面接の経過をすべて録音テープに記録した。それは7号テープで20巻ほどになり、これを文章にしたもののは集計用紙数百枚におよんだ。

これを読みながら、われわれが知りたいことがらをうまく表現していると思われる、現場の教師の言葉をカードに書き写して、分類整理を試みた。分類の基準は、われわれの用意した質問項目に準じたが、地域固有の問題は省略した。質問項目としては用意していなかったものでも取上げるべきだと判断されるものはつけ加えた。

ここに得られたものは、サンプルとしての偏りもあるであろうし、われわれと現場の教師との間柄にも関係しているであろうし、目の前にマイクがあったことも影響しているであろうから、かならずしも、代表的な見解、あるいは、ありのままの生活状況とはいえないかもしれない。われわれもまた、ここからただちに一般的な結論をくだそうとするつもりはない。

しかし、このような段階での記述を整理しておくことは、それだけでも、教師の生活空間の一端を知る材料になるであろうし、今後、教師を研究する際の、予備的な知識や材料として有効なものであると思われる。したがって、いわゆる調査研究とはいささか趣きを異にするが、あえてまとめてみた次第である。

これからあと、分類整理した結果を述べるのであるが教師の陳述には番号をつけておいた。

#### A 教師職に就いた動機とその後の変化

- 001.先生にはなんなく憧れていた。  
ということも、予期していたとおり述べられたが、

002.特別決心して自分から選んだのではなく、ただなんとなくチャンスがあつたためだ。

という話も出た。特に、

003.はじめは予科練など軍隊関係を夢みていたが、体力的にだめで、教員になった。

004.自分では会社へ行きたかったが、知りあいで先生をやっているのが、教師をやらないかとすすめた。

005.ほかの上級学校の受験に失敗したので、師範に入った。

006.高校卒業の時に公務員試験を受けたが、不合格になつたので、学大に進んだ。

というように、ほかの世界を志望していたが、なんとなく教師になったという例や、他の世界に進めなかつたので、やむを得ず教師になったという例がみられる。そしてこのような例は、かなり多くあるのではないかと思われる。

戦後の混乱期に腰かけのつもりで入ったが、そのまま続いているといふ一時的な場合だけでなく、

007.ほかに入る学校がなかつたし、友だちもいったので師範へいった。

008.昔高等科を卒業してから行ける学校としては、結局、師範がいちばんよかつたので。

といった消極的なものもある。

009.工科系の大学に入ったが、当時就職も悪く思うようなところへはいけなかつたのと、家庭教師をやっているうちに、教えることが面白いし自分にもできるということで、もう一度考えなおして学大へ入った。

などには、就職難との関係や、教えることへの魅力などがうかがわれる。

このように、自分自身のことなので控え目な表現をとっているものと考えられるが、積極的に教師職に就いたという声はむしろ少なかつた。ある年配の教師は、

010.むかし自分たちが師範へいったときも、しかたなしにきたのがかなりいたが、今の学大もその点ではいっしょのようだ。

と述懐していた。

女のひとの場合には、

011.女のひとの職業としては、みえもいいし、なにか高級な職業のように思えるからと母に勧められた。

012.女でいける学校というと限られてしまう。栄養士になるか先生になるかであると思っていた。

というように、教師職に対する比較的高い評価、あるいは、世間的外的高い評価が含まれているわけである。

## 教 師 の 生 活 意 識

013. 学大にはいってしまうと、まわりが先生になると  
いう希望が多いから、積極的というのではないが、  
先生になる意志はできる。

014. 先生にしかなれない学校というので、なんとなく  
停滞気味であった。

と、学大卒業者の、学芸大学観も積極、消極まちまちで  
あった。

教職についた頃の回想としては、

015. 先生と呼ばれて、ひじょうに責任を感じた。

016. 子どもが可愛いといふことで職員室へも行かず  
にはりきってやった。

017. 子どものほうも新しく担任してしばらくは目新し  
きでついてくる。

018. なにかすると、すぐにその結果をあせることにな  
って、かえって落ちついた教育ができなかった。

019. 自分や子どもの欠点がわかつてくるとやりきれな  
くなってくる。

などが述べられた。

教師になってから、教職への取り組み方がどのように  
変化したかについては、

020. 教師になって3年間ぐらいはいちばんはりき  
て、ただ、子どもと共に過してきた。その後、技術  
的なことなどを考えだしたが、かえって始めの頃の  
ほうがよかったです。

021. 教師として成長したと思うのは、はじめの2~3  
年で、あとはそれが残っているだけだ。

022. 最初ははりきっていて、4~5年たつと反省期、  
それからしばらくたって再出発というところだ。

023.はじめは、こんなことがわからんかと、子どもを  
たたいたりしたが、自分が結婚した頃からがらりと  
変わった。

024. 10年もやったとき、もう10年になるか、それにし  
ては自分はあまりやっていないな、ということで転  
期がくるとおもう。

というように、3~4年目、10年目といったところで、  
転換期をむかえるようだ、

025. ふりかえってみると、このような態度の変化は、  
かなりはつきりわかる。

ということであった。また、次のような感想も述べられ  
た。

026. うんと年輩になると、自分で体を動かさなくて  
も、子どもが動かせるようになってくるし、若いう  
ちは子どもと一緒に体が動かせるし、中年ぐらいが  
一番中途半端だ。

教職経験を重ねると、

027. 何年かくり返すと、この週にはこれ、次にはあれ  
と、はじめほどあせって計画をたてなくてもやれる  
ようになる。

028. こういう子どもの場合、前によく似たのがいた  
が、あのときはああいうふうだった。といった経験  
にたよれるようになった。

などのような意見が述べられるとともに、他方、

029. 自分が要領よくなりすぎてしまって勞を惜しむよ  
うになる。

030. その場かぎりで子どもに答えてごまかすのが上手  
になった。

など、適当にやることもできるようになるという。そこ  
には、

031. 年をとると、子どもと一緒に体を動かせなくなっ  
てきて、それだけ張り切れなくなる。

という身体的条件や、

032. 子ども対象でいける間はそれでいいが、そういう  
もの以外のものを考えなければならなくなる。

という、学校内外での役割や立場の変化があると思われる  
。そして、

033. 教師というのは30年やったからといって、熟練工  
になるとは限らない。能率をあげているかどうかは  
経験年数だけではきまらない。

という意見があるように、経験を積むことは、教師にと  
って大切なことではあっても、それに加えて、どのような  
人格や教職技術の形成がなされていくかが重要なこと  
であろう。そして、

034. 離れ難い魅力を感じるのは、それだけ自分が  
重大な仕事をしているということが、わかってきた  
からではないかと思われる。

という実感がわいてくることが考えられる。

### B 指導意欲と教育技術

指導意欲について得られたもので、

035. 教育に対する熱意、ファイトがあることが大事、  
これさえあれば子どもはついてくる。

036. 意欲のない先生は、その場を適当にごまかしてい  
て、子どもとの距離が大きい。

などは意欲の有無を重視している意見であるが、

037. 教師には、やはり教える技術が大切だ。いくらす  
ぐれた知識をもち、人間的に立派でも、指導技術が  
ともなわなければ、子どもを十分のばしてやること  
はできない。

038. 小学校では特に指導技術のいかんが大きな影響を  
及ぼす。

などは、指導の技術を重視している意見である。この両

## 試験

論は別に新しいものではなく、どちらが正しいかということではないと考えられる。

今回の面接での指導意欲に関する収穫としては、つぎの3つがあげられる。

その第1は、

039.教師となったからには誰でも自覚はあるしやる気はあると思う。誰でも自分のクラスをよくしたいと思うはずだ。

040.誰でもやる気はもっているが、気持の持ち方や、何かの事情で、はたからみれば、やる気がないようみえる場合もある。

041.やる気の表わし方は人によってちがうので、とやかくいっているが、うかつには批判できない。のとく、発現のし方が違うという意見が述べられたことで、

042.学年のはじめ頃よりも、だんだん学期が進んでくると、やる気はますます強くなるのではないだろうか。

ということであった。

第2には、

043.ひとつ何かやってやるという意気込みがなくて、なんとなく消極的であっても教師は勤まるように思う。あまりいいことではないが。

044.惰性的なものでもやっていけるのは、子どもと一緒にいるという心情が底を流れているからだ。

など、積極的な意欲なしにもやっていけるという、教育活動の1つの見方が述べられたことである。

第3には、

045.やる気が意識過剰になると、子どもの実情に合ったことをしないで、一方的に押しつけるだけで、かえってマイナスになる。

046.意欲というのも、教える技術を通して出していかないと、効果がない。

というように、指導意欲は教育技術を媒介にしないと、無駄になることが述べられたことである。

ひとくちに指導意欲とかやる気とか言っても、その意味するところのものが、まちまちになってしまうくらいがあり、

047.自分ひとりで頑張ってみたところで、どうにもならないという壁につきあたるような気がする。

こともあるなかで、教育活動にうちこむ意欲をどんなかたちで持ちつづけるかが問題になると思われる。

### C 指導態度について

意欲に対して技術が重要であるという意見があることは前に掲げたが、ここでは、広い意味で指導態度に関し

## 研究

ててきた発言をまとめてみよう。

048.いろいろと教育技術や心理学の本など読んだりしても結局自分なりでやっていく、自分の人がらを出してやっていくよりほかはないという気持になる。

049.教師も人間だから、裸でぶつかっていくというのいいと思う。

などは経験とかカンが大切であるという意味だけではなく、教育の営みが個別的、獨自的であって、臨床的性格をもつものであること。人間と人間との相互作用（ふれあい）であること、を述べたものであるといえよう。こういった技術的なむづかしさのなかで、

050.自分が小学校や中学校で教わった時のことを想い出して、毎日をやりぬくという状態だ。

と、新任の教師が洩らしていたことは、経験のなかに受け継がれるべき何ものかがあることを示唆している。

指導の要領について：指導のこつとか指導の要領について質問したが、指導の問題は、教師生活のなかでは、ひじょうに分化していて、各教科の場合や、教科以外の場合のいろいろなことがらが頭に思い浮かべられるらしく、一般的な形のものを聞くことは、ほとんどできなかった。効果があったと思う指導として、生活日記を書かせたことや毎日漢字の書き取りをさせたこと、仲間はずれの子どもに出席表をつけさせてみたこと、など各集団面接の場面で、多くの話題が出た。現場教師による成功例は非常に多いと思われるが、ここでは、その個々の例を省略し、その一部ともいえる「体罰」の問題だけを報告しておく。

051.体罰はいけないと思ったが、たたいてみたら案外効果があったという経験がある。

052.子どもたちが悪いとわかっていることを、あらためて説明してみても効果がない。

053.たたくときは、こちらが感情的になっているからやはり駄目だ。

054.いつもさっぱりした気性の先生でないと、たたいても悪い影響が残る。

055.子ども同志、暴力をまねするようになる。

056.小さい子どもだと、子どもたちのなかに恐怖感が流れるようになる。

057.しつけの面などでは、子ども同志で悪い点など話し合いさせるほうが、叱るよりも効果がある。

などが述べられた。

058.たたく時というのは、こちらも非常にやる気のある時だ。

という意見に対して、「それでは、たたく時はやる気のある時で、やる気がなければ、たたくことさえしないと

## 教 師 の 生 活 意 識

いうことになるか。」と質問したところ、積極的な異論ではなく、

059.自分としては、子どもをたたいたりした、若い頃の方が自分なりにやる気があったと思われる。

という回答を述べた教師もあった。

やる気があっても、たたかない教師が一般には多いのであろうから、この間の関係を問題にすることは困難であるが、少なくとも、体罰を与えて効果があったという時には、教師の「竹を割ったような」人がらと、指導に打ちこんでいる熱心な態度が、生徒に伝わった時ではないかと考えさせられる。

教材研究について：教材の準備についても、指導の要領と同様に、まとまったものは得られなかった。日案よりも週案を確実に、という考え方と、日案の方を詳しくという考え方とが述べられたが、

060.忙しくて指導案はとても書けない。これが書けるようなら、自分も教師として合格点がもらえるかと思っている。

と素直に実情を説明してくれた教師もあった。

このような指導計画を考えたり書いたりするための準備としては、

061.指導書によって能率的に行っていている。

062.教科書に目を通すのがふつう。

といったのが、大多数の状態らしい。時間については、

063.1教科最低20分ぐらい、6時間の授業には最低2時間、不得意な教科があればもっと多くなる。

という答えもあったが、実際にも、こうした質問への答えかたにも、かなり個人差があるようであった。

064.準備をしないでいくと、授業時間の最初の10分から15分はどうしても無駄にすごしてしまう。

ということであるから、準備しないでいくこともあることになるが、そういう場合には、

065.ちゃんと印刷されたテストがあるものだから、それで時間をかせぐ。テストならずばりだから。

066.問題を出して子どもにやらせておいて、その間に考える。

ということも、毎日の指導のうちには、あっても不思議はないであろう。

067.小学校の場合には、教材について改めて勉強しないとわからないということはあまりない。

068.同じ学年を何回か教えた経験があれば、指導の内容はだいたいわかっている。

というのが実情らしいので、したがって、

069.むしろ、指導の方法というか、教授法といったことを、前の経験を反省して、くふうしてみることの

方が大切だ。

ということになる。

教材研究ではないが、経験的技術として、

070.成績をつけるのに「腰だめ」というのをやることがある。ふだんの勘をもとにして、5.4.3.2.

1.をつけてしまう。あとでテストの結果とくらべると案外合っている。

といった話題も出た。

児童中心と教師中心、生活学習と系統学習、生活指導と教科指導について：

071.児童中心のほうが、先生はたくさん勉強して準備しなければならない。

072.文部省から与えられたものを全部消化しなくてはならないということになると、進度を考えなくてはならないので、結局、教師中心の授業になってしまふ。

073.生活学習なんていっていると、なにも教えないことになってしまう。

074.生活学習をやるとばらばらになってしまう。

など。前の2つの意見は、いわば長所を認めながらも、現状では無理であるという意見、後の2つは積極的な反対意見と解せられる。現在の教師の生活から考えて、教師の負担になる相当な準備を前提として効果が考えられているような場合には、現場になかなか受け入れられないと思われる。

生活指導と教科指導とでは、どちらが大切かと聞くと

075.小学校では生活指導のほうが大切だ。

という答えが多いのだが、

076.現実には教科の学習指導に追われてしまう。

077.教科を通して生活指導をするというけれど、やっぱり知育偏重になる。

078.やはり教科中心、教えること中心で昔と全く変わらない。

079.グループ活動による学習指導など、ほとんどやっていない。

というのが現状のようである。

われわれのこの質問に対して、

080.現実の問題としては、教科中心にやらないと、子どもがかわいそうだ。中学校に行くと、いくつかの小学校から集まってくるので、テストをやられたときできが悪ければ、結局、進学や就職にひびいてくる。だから、現実の社会の体制ではそうせざるを得ない。

081.子どもの人数が少なければ、一斉指導とか個別指導ということはあまり問題ではない。

## 試験研究

と答えてくれた教師もあった。

教育目標・指導の力点について：

082.自分なりに教育とはこういうものだ、というのを求めながらやっていくことが重要だと思う。

といわれながら、教育方針とか、どんな子どもに育てたいとかいう質問になると、

083.人に親切な子ども。

084.約束を守る子。

085.男の子なら正義、女の子なら親切でよく気のつく子。

086.人のことを考えてあげることができる子。

といった程度のものしか述べられず、人間観や世界観などはどうなっているのか、伺い知ることもできないし、どんな人間像を描きながら教育しているのか、把握できなかった。そんななかで、

087.できるだけ不親切な先生になって、子どもの自発的学習を伸ばしたい。

088.粗野なところがあってもいいから、雑草のようにたくましい子どもを育てたい。

というのは、現場でのひとつの抵抗であろう。

### D 教え子について

教師をやっていて、いちばん魅力を感じることは何か、という問に対しても、

089.教え子と心のつながりがあるというのか、いつもでも慕ってくれて、年賀状をくれたり、訪ねて来てくれたりするのが、いちばんうれしい。

という答えが、異口同音に出てくる。それも、

090.よくできて大学まで進学したような子は、案外冷淡である。

091.あまり目をかけてやらなかった子や、わんぱくで困ったような子が、卒業後いつまでも忘れないでいる。そういう子が来ると、在学中にもっとみてやればよかったという、なんだか申しわけなかつたような気がする。

というのである。表現は異なっても、ほとんどの教師が、こうした感想をもっているようである。

092.子どもといっしょに体を動かしてやったことが、お互に印象深く残っている。

093.最初に教えた子どもが、いちばん印象深い。長年やっていると惰性になる。

といった意見もあった。いずれにせよ、

094.自分の教えた子どもが、どんな人間になるか、とても楽しみだ。

ということが、教師の生きがいのひとつになっているようである。

上に述べたことは、卒業していった子どもについての楽しみであるが、

095.先生の魅力の1つは、いま、子どもたちから頼りにされているということだ。

096.子どもの純真な気持ちにうたれて、それにひかる。

097.先生、先生といって、先生のいうことには何でも従ってくれる。

というように、単に卒業生だけではなく、目の前にいる子どもとの関係は、教師の生活に大きな影響をもつていることは、いうまでもない。

098.1分でも10分でも、子どもたちと一緒にいてやるよう努力している。そうすれば、子どもが、どんなことでも打ち明けてくれるようになる。

ということは、

099.雑務に追われて、子どもと一緒にいることができにくくなるのは残念だ。

という感想にもなってくる。

100.自分の思っていることが子どもに通じないのは、ひじょうにショックだ。自信をなくしてしまう。

101.子どもたちが、どうして、もう少しできるようになってくれないのかと、がっかりしてしまうことがよくある。

102.できない子どもが、すこしでも出来るようになると、自分の努力が報われたという気がしてほんとうにうれしい。

103.テストでいい点をとってくれると、教えた甲斐があったなあと思う。

というように、教師の意図や努力や願いが、子どもを通じて、子どものなかに見出されたときのよろこびは、教師の生活にとって、大きな支えとなっていると考えられる。

子どもにもいろいろあって、

104.どうしてなのか、なんとなくむしの好かぬ子どもがいて、すること、為すことなんとなく腹がたつ。

105.全然話しかけない子、友だちにいたずらばかりする子、など扱いにくい。

106.困りものだが、けっこうボスになっている。

など、目立つ子、かげのうすい子、手に負えぬような子と、いろいろな子どもについて話題になった。そして、

107.あまりいい子どもよりは、粗野であっても耕しがいのある子どものほうが、教えがいがある。

という意見もあった。

108.子どもは、親のつぎに好きなのは先生だといってくれる。

## 教 師 の 生 活 意 識

109. 子どもは、教師のもっているすべて、を学びとるから、いい加減にはできない。  
というように、子どもに頼りにされ、子どもが素直に教師についてくることはうれしいことではあるが、  
110. 2年もつづけて受持つていると、自分の行動が子どもたちのなかに反映されてくる。こんなのは、なんだかおそろしい気がする。  
111. 教師のちょっとした気分の変化が、子どもたちに敏感にひびく。  
などは、教師の影響の大きさとそれに対する教師の構えとをよくあらわしていると思われる。

### E 教員仲間や職員室の問題

教師にとって子どもとの関係がもっとも重要なことは当然であろうが、子どものことを考えているだけでは済まされない。  
112. 現在の教育活動で、いちばん影響をうけているのは同僚の先生だと思う。  
113.ひとりだけで頑張ると偏りがでてくるから、ほかの先生との交流は是非必要である。  
114. 職員間の和が、現場ではもっとも大切である。  
115. 職員室が明かるくのびのびとしていることが、教育活動には大事なことだ。

など、職員間の雰囲気が重要であることが強調されている。  
しかしながら、このように職員間の調和や協力が強調されているからには、  
116. 職員仲間のことで、外には知られたくないようなことがたくさんある。  
ということは、容易に推論されるのである。それがどんなことがらなのか、深くつっこんで知りたいところであったのであるが、「外には知られたくない。」という言葉のとおり、ある限度までしか話してもらえたかったようである。

117. 職員室では、自分のクラスのことは極力教えたがらないので、ひとのクラスのことはたえず気にして知りたがっている。  
118. あの先生の平均はどれくらいかと、聞かなくてもいいことをきいて、同じようなら安心して、こちらが悪いとなるとあせってしまう。  
119. モリモリとやれば、ほかの先生からねたみをかって、自然、職員室へも行かなくなり、学級王國といふものもできてくる。  
というように相互に、ひとのクラスのことを気にしながらも、  
120. 職員間で腹を割って話すことはあまりない。

121. 教育活動などについて、ざくばらんに話しあえない。個人の感情問題になる。  
などのように、言われている。  
122. 教師のなかにも、すぐ感情的になり同僚関係のうまくいかぬ人がある。あんなふうでは子どもの教育などできないのではないかと思う。  
123. いまの若い人で、学力もあって教育効果もあげていながら、門松をたてる（年の功を重んずる）ことを忘れているのがいる。  
124. 女の先生でも、職場での女性の役目をしない人がいる。  
というような意見もあったし、逆に、  
125. 自分一人が目立つような仕事をして、地域の人からスター扱いされると、ほかの先生に対して何か申しわけないような、かえってつらい、という気持を経験している。  
と、同僚に気を使っている場合もあった。そして、  
126. 職員間のこととは自分一人で解決できないし、だからひとりでいんにこもるということになる。  
のであるのかも知れない。  
校長・教頭について：  
127. 職員室の雰囲気は、校長や教頭によって、ずいぶん変る。  
というように、上司のもつ影響力が強いようであり、  
128. 校長があまりこまかすことまで目をとどかせて、やれやれというと、かえって、いわれたことしかやらないようになる。  
129. 校長のいうとおり動いてさえいればよいという雰囲気になりがちだ。  
130. 校長や教頭が気軽に話せる人でないと、職員室の雰囲気がかたくなってしまって、のびのびとした教育活動ができなくなる。  
131. いくらやっても認めてもらえない、いい仕事が貰えない、上司の人が目をかけてくれない、というのが、いちばん辛い。  
というように、校長や教頭との関係は、教師にとって重要なことである。  
学閥について：  
132. 職員間でも、師範出（学大出）とそうでないものとの間でいやなことがある。しかたがないとあきらめているが、やる気をなくすこともある。  
133. 学閥の主流にのらないと、人事や仕事の面で冷飯をくうようなことが多い。  
と学閥のみにくさをほのめかした意見もあった。しかし、

## 試験研究

134. 最近学大を出て来た人は、あまり学闇などどこだわっていない。いまの校長や教頭クラスのことである。
- と、若い層ではそれほど問題にはなっていないという意見もあった。
135. 学級王国というと、セクト主義のように悪い意味にとられるが、自分のクラスをよく育てられなければ、互に協力などしても無駄ではないか。
136. 知能テストや学力テストなど学年一斉にやって各学級で比較されるのはいやだけれど、ひとつのはげみになる。
- など、職員間の排他性も現実には教育活動の賦活剤になっている、という見方もあるようである。
- 「外部からふれられたくない」職員間の問題が重要であること、および、問題の所在については、おおまかに述べられたので、問題の分類程度はできたと思われるが、具体的な内容になると、あまり触れられなかつたようである。
- ### F 父兄や地域社会との関係
- 教師にとっては、
137. 子どもの目だけを気にしてやっていきたい。のであるが、職員間のこととともに、父兄の目もかなり大きな力をもっているようである。
- 教師の側からの父兄に対する意見としては、
138. 子どもの貌という点で真剣さがない。
139. 子どもを評価するときに、特定の教科の点数だけで判断する傾向がある。
140. 家庭が教科についてしか関心がない。
141. 学校ができるしつけには限度がある。
142. 子どもたちを厳しくしつけようとすると「あの先生はよく怒る」という。
- など、一般の父兄がそのとおりであるかどうか、あるいは、被面接校の地域社会がそうであるかどうかは別として、ここには、こうであってはならないとする、教師の教育観が反映されている。これによれば、
143. 家庭では教科学習ばかり気になっていて、子どもの人間的な発達など考えていない。
- ということになるようである。
- 上にあげたのは、父兄の勉強の重点のおきどころなどに対する教師の意見であるが、これとは別に、父兄の教師に対する態度を問題にしたことがらも多くてた。
144. たまたま学校にきたとき、クラスががやがやしていると、すぐに「あの先生は力がない」などと、とやかくいわれる。
145. 全体をみないで、ごく一部分だけを勝手に解釈し
- て、かけではあれこれと非難しているのが耳にはいるのは、まったくいやだ。
146. 父兄たちは、授業面のことよりも、ちょっとした教師の態度やふるまいについて、うわさをする。
147. 父兄のいうことは、その場かぎりの無責任な、あまり根拠のないことが多い。
148. 父兄がわれわれの私生活についてあれこれい、うらしいことを、いちいち気にしてもしようがないとは思うが、現実には、気になる。
- など、父兄の批判が、教育そのものにむけられているのではなく、教師の行動の末梢のことにもむけられていると思っている場合でも、教師にはかなり気になるようである。
149. 自発性をのばすとか、個性をのばすとかいっても、父兄の要求にあわなければ、受け容れられないでのだめになてしまう。
150. 自分の考え方やろうとすると、父兄から批判されてしまう。
151. だんだん P.T.A. などに迎合してしまうのは、自分の身の安全を考えるからである。
- など、教師の側にも問題があることを認めながらも、
152. P.T.A. などで、なんだかんだといって、先生をたたくものだから、規格化されてしまうのだ。
153. 教員は既成服にされてしまう。
154. P.T.A. ができたために、スケールの大きな校長や教員がなくなってしまったようだ。
- など、父兄という存在に対して、対立的、拮抗的な意見も多い。
- 地域の人たちについて： P.T.A. にかぎらず、
155. 地域の人たちと折り合いが悪くなるのは、教育活動そのものではなくて、私的な生活である。
156. 土地の人たちから頭が高いといわれる。
157. いなかほど、一部の有力者の意見が大きくものをいうので気をつかう。
158. 下宿などでも、いつもみられているようで、くつろげない。
159. 疲れたからといって飲みにいくこともできない。
160. 村の人たちは、日のあるうちは外で仕事をしているので、日が暮れるまでは帰宅できない。
- など、地方特有なこともあるが、教師たちは、かなり気をつかって生活しているようである。
161. 理想をもってやってきた先生が、間もなく失望して、土地の風習などに迎合してしまい、覇気がなくなってしまった例などをみると、なきくなってしまう。

## 教 師 の 生 活 意 識

162. いなかでは、教師は信頼されているだけに、いつたんだめだということになると、もう、戻って来れなくなる。

というように、かなり強い規制力をもっているように見ている意見もあった。

教師は地域のひとと、どんな交際があるのであろうか。

163. 村の人たち相互のつきあいは「先生だから」と、いちおう免除される。そのうちに村の人たちと話しても、つまらぬ話題なのでばかばかしくなり、ますますつきあわぬようになった。

164. 共通の話題がないので、地域の人と世間話など、あまりしなくなる。

などのように、世間一般の人たちとはあまり交際がないようだ。子どもの親たちとの交際でも、

165. 父兄が道であったときなど、気楽に話しかけてくれるようになるまでには時間がかかる。

166. よそ行きの言葉では、ほんとうに自由な会話はできにくい。

というように、教師の枠から離れることはできない。しかし、教師のなかには、

167. できるだけ一般の人に挨拶をし、話しかけて交際することが、自分の教育活動のゆきづまりを開くのに役立つ。さりげない話のなかで、一般の人が教師や学校に、なにを要求しているのかがわかつてくる。

というような努力をしているひともあるようである。

多くの教師は、地域社会のもついわば環境の影響のまえに、教育活動の限界を意識しているようであることは次のような意見にあらわれている。

168. いくら優秀な先生が、いっしょにけんめいに指導しても環境には勝てない。環境の力は大きい。教師の努力ぐらいではどうにもならない。

169. 教育活動の範囲の限界は、経済的問題になる。子どもの家庭が豊かなら、教育効果ももっとあがる。

そして、

170. 教師個人ではどうにもならない家庭環境の子どもなどには、どうしたらよいかわからなくなる。

というように「無力感」を味わっていると考えられる。出身地で先生をやる場合も案外多いのであるが、

171. 自分の出身地とか、親戚の人が同僚にいるとかいった学校に勤めているときが一番やりやすい。安心していろいろなことができる。

172. よそ者の先生なら問題になることでも、その地域出身の先生だとうまくおさまることがある。

173. 地つきの先生のほうが、その地域に明かるいからいいと思う。

と、やりやすさをあげているが、一方、

174. 地つきだと、失敗したら行き場がないという気になるから、どうしても消極的になる。

という心配もあるようである。

175. 最初はよその土地へ行って、それから帰ってきたほうがいいと思う。

という意見もあった。

このように、教師が家とか親戚といった関係から離れないほうがいいというのは、農村の問題でもあるが、教師の問題としても興味のあることである。

176. P.T.A. とか上司とかに思ったことをどしどしと言える人は、たいてい教師をやめて家業だとか、何かほかの道で生活していく余裕をもっているのではないか。教師だけが生活の頼りだと、それほど思いきったことはやれないのが現実だ。

というのは、P.T.A. や地域社会とうまくやっていくかどうかは、生活の問題にも関連してくることを示唆しているといえよう。

### G 教師および教師職の特徴

すでに、今までみてきたところで教師や教師職の特徴が、かなり生き生きとてきたのではあるが、ここでは、教師および教師職の特徴と思うものは何かとの質問に対して述べられたことで、ほかのところには入れにくいうことがらを集めてみた。

177. 自分たちの特徴といわれても、よくわからない。

ほかの人が見たほうが、よくわかるのではないか。というように、こうした質問ではあまり多くは述べられなかった。

教師をやっていると、

178. 大人に接していないから、井の中の蛙大海を知らずというところで、世事に疎くなる。

179. 正直になりすぎて、かけひきができない。

180. いわゆるお人よしになる。

181. おせっかいになり、いらぬことまで口出しそう。

182. 子どもを使うものだから、横着になる。

183. 大人に対しても、子どもと同じような調子がでて礼儀にかけたり、頭が高くなったりする。

184. 小さなことでも大切に思うようになる。

185. こまかにころまで気がつくようになる。

186. 最初は苦痛であったが、しゃべることが上手になってきた。

など、いわゆる教師タイプといったものが備わってく

## 試験

## 研究

教師にとって子どもが対象であることは、まえに述べたように、中心になることであるが、そのことから、

187.同じようなことをくり返しても、生きた対象なのであきがこない。

188.子どもを相手にしているので、いつまでも若々しい気持でいられる。

ということもあるのであるが、

189.世間の人から、先生は学校で子ども相手に遊んでおればいいから羨やましい、などいわれると腹がたつ。

190.子ども相手だからといって、はたからみるほど気が楽ではない。

と、世間のひとが思うほど、のんきなものではないと考えているようである。

191.まえに技術関係の仕事をやっていたときは、一日の仕事の成果がつかめたが、教えることは、目にみえて効果があらわれるということがないので、つかみどころがない。仕事の区切りというのがなかなかつけにくい。

192.長い目で見ていかないとだめで、効果をあせってはいけない。

などは、教育という仕事の一面をよく表わしている。

193.民間会社などに入ると、大学卒でも、最初は下端になるだろうが、教員の場合には、最初から、先生先生といわれるから、調子にのりやすい面もある。

194.なんといっても教室へ行けば王様だから、宮仕えということなど、たいしたことはない。

というように、比較的若いうちから一人前になれるのであるが、

195.まえに勤めた会社などは、金儲けだけで割り切るが、学校はそうではない。なさけがある。

196.学校では、ぬるま湯にはいっているようなもので、外へとび出したら風邪をひく。

197.いまの世の中では、人間味のあるところのはうだ。

などのように、いわゆる世間のせち辛い荒波から守られた社会である、という意見も出た。

このようなことも関係して、

198.世間知らずになる。

199.長年教員をやったからといって、他の社会にも通用するような技術は何も身につかない。

200.教員の古手はつぶしがきかない。

ということが言われたが、一方、

201.世間知らずだとか温室育ちというが、それでなく

ては勤まらない。あまり世間のうらおもてを知りすぎていては、教育などという損得では割りきれない仕事などできない。

202.先生タイプといわれるほうが、教師にはいいのだ。

と、積極的な意見もきかれた。

203.教師としての生活と社会人としての生活とで、うちおもてがあるようになりたくない。

204.子どもに接する場合と、大人に接する場合とを、うらはらにしている教師がある。

などのように、一般の人の生活でもよくみられる、「おもてむき」と「ほんとうは」といった二重生活が、教師の場合には、自分たち自身にも強く意識されているところに特徴があるように思われる。

### H 教師の人間形成および研修

人間的に成長したと思うのはどんなときか、という質問に対してはあまり多くの答えが得られなかった。

205.抑留中の2年間、人間は生きることとたべることだけしか考えなくなる。教養も何もあったものではないことをしみじみ感じた。

206.敗戦を転期として、環境に順応することを満足するようになった。

というように戦争体験を契機としたものが少しあげられた。

207.大学へ内地留学して、学問とはこういうものかということを知ったのは、あとあとまで残っている。などはむしろ特殊な例であろう。なかには、

208.教師職に在るために人間的に成長したことは、とくにない。

といい切っている意見もあった。

影響を与えられた人物や書物、教育思想があったら、教えて欲しい、という質問に対して、あげられた人物としてはペスタロッチ、秋山ちえ子、書物として、森信三の著作、石川達三「人間の壁」ぐらいである。40名ほどの教師に面接して、この程度であるから、現場の教師たちは、あまり読書していないようである。

指導書や、二、三の教育雑誌や一般雑誌以外には、ほとんど読まれていないことは、

209.直接教科と関係のないような勉強は、なかなかできない。

210.教材以外に、教養を高めるための読書などする人はすくないと思う。

ということからも、うかがわれる。

211.教師にとって自己研修をすることはたいへん大切だと思うのだが、実際には、子どもにむけられるだ

## 教 師 の 生 活 意 識

- けで、自分に目をむけることは少ない。
- 212.教師自身、知育偏重にさせられてきて、生活上、精神上なにか一本欠けているような気がする。これでは教育ができない。
- 213.なんだか、昔の先生は、一種独特な風格があったような気がする。それぞれ、持ち味があつたし、独自の信念をもっていたような気がする。
- 214.教師の個性が失われているのに、個性の教育などできるはずがない。
- というように、みずからの人間を磨く必要は感じていても、実際には、逆の方向に押し流されている状態のようである。
- 研究授業について：教師仲間の問題でもあるが、公けの研修の状況はどうであろうか。
- 215.研究授業は見せる授業で、1時間ぐらいは立派にやれるが、年間を通じてはとても続けられない。
- 216.研究授業のようなショーの時だけでも、うまく演ぜられる人は、それなりにすぐれた技術をもっているのだ。
- など、見方もいろいろであるが、研究授業後の討論などでは、
- 217.授業内容や子どもの理解といった本質的な問題よりも形式的なことがらが取あげられ勝ちだ。
- 218.研究授業などで「そんならお前はできるか」といわれると困るから、ひとの授業にはけちをつけないというような空気ができる。
- ということになり、
- 219.教師仲間の研究会などでは、批判、討論などズバリといふあうと、あとあとまで残るので、結局、研究会にならないことがある。
- ということになってしまのであろうか。
- 220.子どもたちを自習させてても出かける価値のある研究会などあまりない。
- 221.概して、形式的で内容に乏しく時間がもったいない。
- 222.かりだされて、いくだけである。
- など、校外の、研究も実が入ったものではないようだ。
- 223.研究指定校とか研究会の当番校などになると、すごく時間をとられて余裕がなくなる。
- 224.研究指定校の研究なども、わけもわからずがむしゃらにやるだけだ。資料を集め並べるだけでやっている者にもわからないようないがある。
- などと研究指定校など、もてあまし気味な気持があらわれているといえるであろう。
- 225.友だち的な集まりで、お互にたたきあうのは、す
- ごくためになる。
- 226.同じ組の指導案を何人かで作ってきて、討論しあうのは、勉強になる。
- などは、研修をみのり多いものにするためのいとぐちになるのかもしれない。
- ### I 個人生活、家庭生活の問題
- 227.教師も人間だから、自分の生活の安定、つまり経済的な安定をいちばん望んでいる。教師をやめないのはそれが一番大きなところだから。安いなりに、いちおうたべていけるのではないか。
- 228.ぼやぼやしていて落伍者にでもなったらいへんだ。いい年をして、いまさらどこへというあてもないし。
- 229.いかにこの職業のなかで身を守ってまもりぬくかということに、なりすぎるようだ。首切られたら、勤めるところなどないと考えると、など、経済的な安定という点で、いちおう保障されているかわりに、ここから外へ出されたら困るからしがみつくというと大げさだが、身の安全ということもかなりの比重をしめるような考えが見うけられる。
- 230.車を買うまでは其稼ぎだ、とか、副収入をかなり得ているひともある。
- というように、積極的な計画をたてている人もあるようだ。
- 231.退職する頃まで勤めていれば、恩給もつくし、家もあるから老後のことはあまり心配はない。
- 232.ともかせぎでも、恩給のつくまでやらないと損だ。
- などのように、恩給も生活設計には欠かせない。
- 233.自分の子どもをもったときと、もたないときでは、子どもの見方がすごく変った。
- 234.自分の子どもをもって始めて親の気持がわかつた。親の気持を理解したうえで、教育することができる。
- 235.自分と同じように、父兄は子どもが可愛いのだと思うようになった。
- 236.家庭をもつと、子どもに対して大らかになる。
- というように、子どもを持ってみて始めて気がつくことがあるのは、教師職ならではのことであろう。その反面、
- 237.家庭をもつと、ファイトとか意気ごみといった点で欠けてくる。四六時中、学校の子どものことを考えておれなくなってくるから。
- 238.家庭をもつと、よけいに行動範囲がせまくなってしまう。
- という声もきかれた。

## 試験研究

- 239.教師だというので、子どもまで特別な目でみられるのはかわいそうだ。
- 240.家庭や子どもの教育など、後指さされないように気をつかう。
- 241.自分の家庭がうまくいかないのでは、ひとの子の教育などできない。  
など、教師であるために家庭生活にも気をつかわなくてはならないようであるが、自分の子どものことになると、
- 242.ひとの子は教えられるが、自分の子どもの勉強はみてやれない。
- 243.自分の子どもが成長してくれるのが、いちばんの生きがいと思う。なんとか自分より伸びて欲しいと願っている。
- 244.自分の子どもは、自分のあとをふまないで、順調に成長して欲しい。  
など、ふつうの家庭と同じような親の気持をあらわしている。
- J 教師養成について**
- ここでは、おもに教員養成の大学・学部の教育に対する注文がでたのであるが、
- 245.むかしの師範のように広く浅くなんでもできるようにするほうが、小学校では困らない。
- 246.教科専門科目や教材研究は、むずかしいばかりで小学校の現場では役に立たない。
- 247.小学校の免許状には専門科目がなくていいと思う。  
など、広く浅くやる必要があるという意見がほとんどであった。とくに芸能科目では実際に困るようで、
- 248.音楽の教科書にててくる歌のレコードを買ってきて、それに合わせてオルガンが彈けるようになるまで猛練習をやる。
- 249.子どもよりも覚えが悪くなっているから、身につけるまで、たいへんだった。  
など、現場にきてから涙ぐましい努力をしている人もあるようである。
- 250.大学でやった教材研究は役に立っている。  
といっている人もあった。
- 251.学大や師範出の人は、技術的には上手だが、先生意識が強すぎて、狭い感じがする。
- 252.学大出の人は学力はあると思うが、社会人として欠けるところがある。
- 253.教員養成の大学や学部は、教員になるのだという信念をもたせるようにして欲しい。
- 254.教員養成ということをもっと打ち出して、教員の

プライドを植えつけて欲しい。いまのは、一般の大学と同じだという考え方があるから、かえって教員にしかなれないという気持をもちやすいのだ。

というように、ある面では、いわゆる教育者精神への郷愁といった感じもするが、教員養成の大学や学部で、人間形成ということがなされていないのではないか、という批判とも受けとれる。

255.いまの教育実習は、期間も短いし、やることも少ない、あれでは実習としての意味がない。

256.教育実習では、学級経営のことなどにあまりタッチしなかったが、現場へ入って知らないことばかりで困った。

など、教育実習に対して、もっと徹底させるべきであるという意見が出た。

教師養成の問題については、ほんとが、広く浅くといった程度のことでの、教育技術の問題、教養の問題、教員養成大学や学部の制度の問題、など、専門職としての教師を養成するために、もっと現場からの声が出てよいと思われることが、あまりでてこなかった。それは、大学における教員養成にあまり期待していないのか、あるいは、現在の生活には、大学の問題は関係がないと感じているのかであろう。

## **K 新任教師へのアドバイス**

新任教師へのアドバイスとしては、

257.職員間の和が大切だ。

258.困ったことは先輩に聞け、職員室で話しをするように。

259.新任のひとは、とかく一直線に走りすぎる。授業なども知識の注入に走りすぎる。

260.教師という職業は決して甘いものではないから、それなりの覚悟が必要だ。

などがあげられたが、そのうち、もっとも強調されたのは、職員室の雰囲気にとけこむこと、すなわち、職員間の和を大事にするということなのである。

ところが、新任や転任の教師の側でいちばん困るのは、  
261.この仕事は誰がどう処理するのか、さっぱりわからないし、教えてもらえない。

262.なにも教えてくれず、気がきかないとか出しやばりすぎるとか云われる。

263.新卒ではあっても敬遠されるのか、何も教えてくれなかつた。

などのように、校務分掌の実際とか、年間計画の作成とか、学級経営のことなどが「ほとんど教えてもらえない」ことなのだとそうである。

この両立場の意見がともに正しいとするならば、「わ

## 教 師 の 生 活 意 識

知らないことは先輩にきけ。しかし、自分でわかるまでは教えてやらない」とか「迎える方ではだまって監視しているから、職員仲間にうまく入ってこい」とかいうことになる。これは教師の技術が経験を通して苦労して体得されてきたもので、簡単には教えてやれることであるように思われていたり、黙っていてもうまく教師仲間に入ってきて、一人前にやれるようでなければ、教師の仕事はつとまらないのだと思われていたりしていた、昔からの伝統のようなものではないかと考えられる。

転任してきた教師へのアドバイスなどは、具体的にはどのように行われているのであろうか、知り得なかったのであるが、

264. どこの学校もだいたい同じだ。

265. 転勤して気を使わなければならないのは職員の人間関係の問題だけだ。

という意見が示すように、だいたいどこの学校でも似たりよったりで、要領はわかっている筈だ、というところなのではなかろうか。

### L 小学校教師、女教師の問題、その他

同じく教師であっても「小学校教師」という点が強調されて述べられた意見が若干ある。

266. 小学校の子ども、特に低学年の子どもは、教師との精神的交流というものがないといつてもいい。

267. 子どもが成長するにつれて、小学校の先生との心のつながりがうすれしていくようで、ちょっと淋しい気がする。

268. 中学校の同窓会はあっても、小学校の同窓会があるところは少ない。

269. おぼえているのは1年生と6年生の時の担任の先生ぐらいで、まんなかでならった先生など忘れられてしまう。

270. 小学校でいくらしつけに力を入れても、中学校や高校で忘れられてしまって、効果が期待できない。

271. 子どもが小さくて、期待をかけるにも、将来のこととが予想できない。

など、子どもが小さいので人間的なつながりができにくいこと、上の学校へとられてしまうような淋しさをもつことが述べられている。そこから、

272. 小学校の先生がいちばん大切なのが、報われるることは少ない。

ということにもなる。もっとも、逆に、

273. 小学校のほうが、先生との接触も多いし、よく覚えられている。

274. 小学校のほうが、子どもが小さいだけに、いつもでも慕われる。

という意見もあった。また、

275. 小学校だと、なんでもできないと勤まらない。

276. こんなことまでと思うことまで世話をしてもやられてはならない。

277. 中学校から小学校へくると、ここまで言わなくてはならないかと思って、やきもきする。

など、こまかい世話が必要であることを言っている。

278. ほんとうに自分の思う教育をしようと思うと、やはり小学校だ。

279. 小学校、中学校、都会、いなか、いろいろな学校を廻ってきたが、小学校の先生、しかもいなかの小学校の先生が、いちばん純粋に子どもに打ち込む。

280. 小学校のほうが、子どもが敏感に反応してくれる。

など、小学校に惹かれる話題も出た。そして、

281. 小学校の教師が、小学校の教師であるということをもっと誇りにしてもよい。なんだか萎縮してしまっている。

というように、小学校教師であることに自信や誇りをもつべきであるという意見も出された。

男教師についての意見はきわめて稀であるのに対して、特に女教師をとりあげた意見はいくつか数えられる。

282. 男の先生にくらべて、女の先生はそうとう特別視される。

ということなのだが、

283. 低学年の子どもは女の先生が受持ったほうがいい。女でなければ気がつかぬこまやかな教育が必要だから。

という反面、

284. 高学年や中学校など、女教師には無理な面がある。

285. 同じ学校を出ているのに、男の先生ならまかせられても、女の先生にはそれがなされない。

286. 男でなければできないという仕事はあるが、女でなければやれないという仕事の範囲はあまりない。

というのは、

287. 宴会など学校でやると、結局、女の先生に負担がかかること。

などのように、周囲の理解がないことも手伝っているが、

288. 女の先生は、かなり経験年数を経ても、あいかわらず、自分のクラスぐらいしか関心がなく、学年全体、学校全体をみる視野がない。

## 試験研究

という批判もでている。

共嫁ぎの場合には、

289. 女教師はどうしても中途半端になる。家庭に帰れば、学校のことができなくなるから。

290. 子どもを実家であずかってくれる場合ならいいが、そうでもないと、子どもができるとやめなくてはならなくなる。

というように、現状では、家庭の条件がいいか、無理を覚悟するかしないとやっていけないようである。したがって、

291. 結婚して2～3年はやってもいい。

292. 続けるかどうかは家庭の理解による。

293. ある程度経済的に安定したらやめたいと思っている女の先生もある。

という意見にみられるような構えになりやすいのである。

今までの分類で扱わなかったが、よく話題になったことに、雑用が多いことがあった。つまらない書類や、金あつめなどのほかに、

294. 出張が多すぎる。郵便や電話ですむことまで、いちいち出頭させたり、会議を開いたりする。

295. 小さな学校だと1人欠けても補いがつかないので同じように出張しなければならない。

などの意見もあった。

296. やっぱり都会の先生をやりたい。田舎では刺激がない。

297. 小さな学校のほうが、責任をもたされるし、いろいろな仕事が手がけられて、やり甲斐がある。

ということは、大都会ではきけない声であろう。

298. 教員ほど、マスコミに弱いものはないと思う。すぐに一喜一憂する。

299. 同じことでも教員がおこした事件だと、大きく報道されるから、気をつけるようになる。

などは、マスコミも、父兄や地域社会と同じような面があることを、言い表わしているようである。

### IV 父兄との面接とその概要

現地に滞在中、同地区の父兄たち5名に集団的に面接し、ふだん学校の教師について思っていることを、忌憚なく話しあってもらった。

その結果から、父兄の一般的な考え方をひき出そうといつもりはないが、記録にもとづいて、教師についての見方がよくあらわれていると思う陳述をぬき出して、列挙しておこう。

300. 軍隊経験のある先生とない先生とでは、大きな差

がある。

301. 若い先生は仕事はよくやるが、生活の面では問題が感ぜられる。

302. 若い先生のなかには、地域の役職の人にも挨拶をしない人がいる。

303. 子どもの前で酒を飲んで酔ったりするのは困る。

304. 子どもたちのしつけの面では先生が率先して実行し、模範を示して欲しい。

など、現代の教師一般に対する批判や期待が多く述べられた。父兄のこのような教職観の基準となっているものは、

305. 軍隊の経験のある先生は、すじがねが通っている。

306. 背教わった先生が、教壇に立ったときの、あの謹厳な態度がいまも印象に残っている。

307. 民主主義になったから、生徒と先生は友だちみたいで、昔の先生ほど貴重がなくなった。

308. 家庭より学校の先生のいうことを子どもはよく聞く。だから、学校の先生はこわいものだ、というところがあって欲しい。

など、自分たちが子どものときに教えられた先生への印象が大きく影響している。「昔の先生」は子どもとしての印象で、「今の先生」はおとなとしての印象で、見ていているわけであるから、時代の差異はあるにしても、このような批判をもって、教師の側の差とみなすことは困難である。

309. 今の子どもたちにも、昔われわれがもったような印象をもつような先生がいるといい。

というのは、昔の先生への郷愁というところであろう。

310. 道でゆきあっても気軽に話しかけてくれて、いやでも父兄が真面目な話をさせられる、という点が大切だ。声もかけてくれない冷たい人だ、という感じはいけない。

という意見も出された。しかし、

311. 先生と父親との接触はほとんどない。

312. 先生のいい悪いは、子どもを通してもあるが、よその人のうわさによるものも相當にある。

313. 学校の先生と親しくなってみると、先生というのもなかなかへんで、一生けんめいやっているし、親のほうでも、もっとやらなくてはという気になる。

のよう、教師についてあまりよく知らないという面もあげられる。

314. 先生ともなると、何でも知っていなくてはならないから、先生になるのもたいへんだ。

315. 先生というのは、相手が子どもばかりだから、視

## 教 師 の 生 活 意 識

野が狭くなるのではないか。忙しいだろうが、多少大人とのおつきあいも頼みたい。

316. 父の職業を継ぐのは先生の場合多い。

317. 先生はいつまでたっても先生だ。50才になっても昔ならった先生の前にでると、ちいさくなる。

など、教師との面接で出された話題と似ているものも、あった。

318. 山の中には、いい先生がきたがらない。

319. 土地出身のひとばかりだと、停滞してしまう。

320. 先生自身、山の中はもの足らないといつて省みてくれれない。

321. いい先生は、たいてい外へ出ていくってしまう。

322. 若い先生が、腰をおちつけてやってくれるといい。

323. 地域の将来のことを考えてくれる先生が必要だ。

324. これからんの産業とか、農業経営のあり方などを、考えてほしい。

など、地域特有の不満や希望もある。

### V 卒業生有志との面接とその概要

父兄と同様、集団的なかたちで、特に卒業生という立場から、先生について話してもらった。男4名女2名。年令は20才前後。

325. 学校時代には先生はえらい人だと思ったが、学校を出てしまうと感じがちがって、ガッカリする。

326. 世間を知らないし、一般社会の人間関係を知らない。

327. いま考えれば、先生といつても一般の人と、あまり変わらない。

など、卒業してから、先生に対するみ方が變ってくることを感じさせられる。

328. 先生も人間だから仕方がない。

という感じが、期待はずれという感じになって、でてくるのをあらう。しかし、

329. 先生の考え方につよく影響をうけて、卒業してからも、何かが残っているようだ。

ということも認めているのである。

330. いま考えてみると、年とった先生のほうが、考えが深く軽はずみではなかったように思うが、当時は、若い先生のほうに魅力を感じていた。

331. 先生が、よく変わるのはいやであった。

332. いや味をいわないで、そのものズバリ叱ってくれた先生のほうがよい。

333. やはり厳しい先生のほうがあとあとまで考えさせられるし、印象に残っている。

334. 卒業してから知った先生が学校にいなくなると、学校へはほとんど寄りつかなくなる。

というように、卒業生には卒業生としての感想が見られた。

335. 先生という職業で、一番魅力のある点は、真剣にうちこめるというところだ。

336. 先生をやっていると、ひとの心を読むことを覚えるので興味あるのではないか。

337. 先生はくり返し教えるので忘れることがないから、もの知りになっていい。

と、教師職のいい点をあげているかたわら、

338. ふつうの会社勤めとえらくちがう。ガラス張りの中での生活で、はたからいつも見つめられている。

339. 校長になるまでは、頭をさげていなくてはならない。

340. 先生は父兄と生徒の板ばさみになって、頭があがらない。

などを、同情的に語ってくれた。

341. 先生は娯楽という面に欠けていると思う。それでわれわれのことを理解できないのだ。

342. 先生はもっと地元のことを考えて欲しい。

などは、青年らしい、先生に対する要望をあらわしているとみるとみることができよう。

### VI あとがき

断片的なものの羅列というくらいはあるが、以上で、われわれが教師の生活のいろいろな面について、教師自身が語ってくれたこと、父兄や卒業生が語ってくれたことの概要を終る。これらの表現は、われわれが面接したというフィルターにかけられていることから、教師の生活を適切にあらわしているかどうか、疑問が残らないでもない。また、限られた地域の教師たちであるから、一般的なものとはいえないかもしれない。しかし、これらの現場教師の言葉をかみしめてみると、教師の生活の眞の姿に触れるような問題を知ることができるようである。

われわれは、面接調査の記録をまえにして、ここから結論として何がひきだせるのか、若干困惑したのではあるが、このように整理してみると、簡単に結論をひきだすまえに、まだまだ、この種の資料を豊富にする必要があると感じたのである。そして、このような資料が、教師の研究を現場に即してすすめていく際の基礎資料として有効である、という自信をもったのである。

付記：われわれの研究のために、貴重な時間をさいて御協力くださった、現場の先生がたに心からの感謝を捧げます。先生がたの御協力がなければ、これだけの資料が得られなかつたことを思い、厚く御礼申し上げます。